



Title	<資料紹介>「藝術新聞」目録：自第六三三号至第六七四号（不揃）
Author(s)	齋藤, 理生
Citation	阪大近代文学研究. 2022, 20, p. 34-47
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/87531">https://doi.org/10.18910/87531</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《資料紹介》

「藝術新聞」 目録

——自第六三三三号至第六七四号（不揃）

齋藤 理生

「藝術新聞」は、戦前から戦中にかけて、文学・出版・絵画・音楽・演劇・映画などに関わる情報を週に一度、新聞の形式で発行していたメディアである。本稿は、青山毅「《藝術新聞》細目」（『ブックエンド通信』一九八二・二）、山内祥史「『藝術新聞』目録——自第一五一号至第三七二号（不揃）」（『神戸女学院大学論集』一九八九・一二）、齋藤理生「『藝術新聞』目録——自第五九九号至第六三三号（不揃）」（『阪大近代文学研究』二〇二一・三）を継ぐものである。六三三号は一九四三年九月四日に発行され、六七四号は一九四四年六月一七日に発行されている。そのためこの目録には、戦局が逼迫してゆく時期の藝術界、出版界の状況が反映されている。なお、六七四号より後の号は実見できていない存在するかどうか不明である。

前稿に続き本稿でも、巻頭の時評と署名のある記事を中心

に採録しつつ、署名がなくても稿者の主観で欠かせないと判断したものは採りあげている。なお、前稿では六一三〜六三二号を全四面と記載していたが、これは八面の誤りであった。これらの号で四面に掲載されていたとした記事も、すべては八面の掲載である。ここにお詫びして訂正する。

第六三三三号 昭和一八年九月四日 八面

決戦下に開く上野の季節 絢爛の三展 「アッツ玉砕」

に続く彩管報国の決意 院展、二科、決戦美展同時に

開く都美術館

中村不折小伝（七）

まことに藤村翁は「白い花」の文豪

死の直前迄自然詩人

藤村先生を憶ふ

石井柏亭 一

安田鞞彦（談）二

長田秀雄（談）二

想ひ出す儘に 藤村先生告別の日に 勝本清一郎 (談)	二
島崎藤村年譜 (二)	二
出版 良書でも不急の書籍は不承認の方針である	三
不急出版物の審査益強化	三
画伯へ依頼の装幀謝礼一万円 都合十冊の豪華版	三
戦記物が圧倒的 大阪図書館読書調査	三
映画批評家の貧困 京極太郎	八
<b>第六三四号 昭和一八年九月二一日 八面</b>	
待望の季節を控へて 文展と絵絹配給問題	一
美統でも頭を悩ます	一
大衆五大雑誌十一月号を前線の将士へ贈る	一
軍人援護の趣旨に添ひ特集	一
時評 必勝の信念は不動なり	一
米百俵の底に流れる思想的性格が問題	一
文壇に久しぶりの爆弾	二
くさかげ 福田栄一	二
文壇防空壕めぐり (三) 貰つた土から南瓜を採取 長田幹彦氏	二
島崎藤村年譜 (三)	二
「伊の降伏」と国民学校教科書 来年の本は印刷済み	三
事実を生きた教材とする	三
出版物の印刷製本の簡素と能率化 贅沢本は追放する	三

雑感 映画の重役鍊成 よい映画を作るため	八
映評 奴隷船を見て 富士津守	八
京極太郎	八
<b>第六三五号 昭和一八年九月一八日 八面</b>	
在野美術諸団体の総解散説は実現薄弱	一
二科の動向各方面で注目さる	一
時評 生産に増産に 一億蹶起の秋 石井柏亭	一
中村不折小伝 (七)	一
文壇防空壕めぐり (四) 文報の防空壕は三つ 戸川事業部長	二
感激の独訳 古事記に就て (七) 木下祝夫	二
河湾子訓練所にて 阿部静枝	二
自選小説を建艦献金 博文館が十月に出版	二
聖武天皇一千五百年祭に 土岐善麿氏新作奉納	二
島崎藤村年譜 (四)	二
文学者の決意について 尾崎士郎	三
文学者の信念 上林暁	三
読書週間を開催 思想戦力強化へ 菅原雷吉	三
舞踊家の覚醒を促す 水守亀之助	四
掌篇文藝 わしの子ぢやなかつた	四

第六三六号 昭和一八年九月二五日 八面

国内必勝態勢を強化 一億総員が戦闘配置

時評 比島建国へ 印度の飢饉

感激の独訳 古事記に就て (八)

洛北

新刊の詩集を枕辺に 老詩人兒玉花外氏逝く

島崎藤村年譜 (五)

無柯亭雜記

「若い陣營」の筆者にのぞむ

第六三七号 昭和一八年一〇月二日 八面

待望第六回文展の搬入愈々開始さる

昨年より受付点数増加

大日本産業報国会中央本部機構人事一覽表

感激の独訳 古事記に就て (九)

「綺堂賞」の設定と各委員の顔ぶれ

加藤武雄の友情 星湖老へ

島崎藤村年譜 (六)

竹槍訓練

大東亜文学登竜門 「興亜文学」賞確設

動員された五雑誌 腕によりかけて編輯

前線慰問に内容を充実

晩近製本術講義 出版会を煙に巻く法

勤労者のための演劇指導に就て (中) 山本久三郎 八

第六三八号 昭和一八年一〇月九日 八面

決戦下に呼応した綜合官展の実現

第六回文展各部入選発表さる

各審査員の所感

(前田青邨、辻永、齋藤素敵、清水亀蔵)

時評 戦争と文化

文科系の学者の動向と「期待される夜間帝大」

文報の勤労報国隊 いよく近く結成さる

漱石山房 将校寄宿舎に

郷国飛翔吟

十月の小説評

※佐藤春夫「よもぎふ日記」・島崎藤村「東方の門」・

神山潤「輸送班」

古谷綱武氏 「徵用」来る

富本憲吉氏に委嘱 文報徽章中旬頒布

井上文藝課長 名調子一席

出版 不正出版を防止 関係団体協議中

作家が原稿を売り歩く 煙に巻かれる出版社

書店めぐり 櫻井書店



大東亜共同宣言

出版界の決戦体制 整備要綱愈々決る

出版業者の国家性を昂揚

時評 必勝の信念

女流作家 時局認識を正し 各持ち場を協議

情報局が最近情勢説明

相聞居雑詠

手帳 国枝完二と長岡言葉

創作時評 十一月号 日本的作品

※儀府成一「融雪期」・影山正治「二つの戦史」・緒方久「昭和国民史」

評論 古典と限界

出陣の学徒に推薦する書物 感銘の一語を胸に 村松梢風

佐佐木信綱博士が大映に和歌一首を

「出征前十二時間」に発表

第六四三号 昭和一八年十一月三日 八面

公募展中止か存続か 美報の聯立展提案

大暗礁に乗り上げ 新制作派・二科強硬反対

時評 出版界に望む

社団法人 日本美術報国会・事務局人事機構一覽表

同人雑誌出版株式会社 文藝誌整備に登場か

お野立跡 荻原井泉水

二 二 一 一 一 二

文化奉公会 新雑誌発行

十二月八日を期して 帰還作家の獅子吼

鬼太郎の思ひ出 銀行で洋食を驕られた男 長田幹彦

出版整備の種々相

第六四四号 昭和一八年一月二〇日 八面

公募展中止必至 美術展も許可制へ

最高機関新設近し

時評 戦ふ美術

巨星墜つ 徳田秋聲氏遂に逝く

雑誌統合に詩誌側の疑議 四新誌に統制案提出

手帳 料理番に廻る芙美子女史

逝ける秋聲氏を憶ふ

創作時評十一月号 報道班員の態度に就て 上司小剣(談)

※里村欣三「北島にて」、榊山潤「南方記(五)」

時局下

窪田空穂

第六四五号 昭和一八年一月二七日 四面

決戦態勢樹立へ 軍需省農商省主点に

美術界大統制確定 細目十二月中旬に発表

時評 勝利の年へ

新興雄渾な文学に生かす 大東亜共同宣言

五原則の作品化実行へ

一 一 一 一 一 一

悲しき盛儀 全文壇人に惜しまれ 初の小説部会葬

柩前に遺作を朗読回向

俳聖二百五十年忌 義仲寺に墓前祭

未完成品「縮図」研究 廣津氏の手で

淡々たる君子人——故秋聲を送る弔辞——

友人総代 正宗白鳥

第六四六号 昭和一八年二月四日 四面

第三次大東亜文学者大会 中国作家協会主動に

南京に開催決定

御舟遺作展を観る 菊池契月

爆弾と機銃弾の中で(下)——南方前線基地写生行——

山口華楊

文展日本画評(三) 時代的情熱の諸作 豊田豊

初七日を迎へて 徳田一穂

文藝時評 一読すべき著書と作品 風祭音哉

第六四七号 昭和一八年二月一日 四面

工場へ農園へ 一億総配置の時局に 藝術界人も戦列へ

帰農精神もやうやく台頭

詩部会総会 大東亜詩人の交流等議題に

他部会は明年春に開催

詩誌玉碎に 前田鐵之助氏 紙業翼賛の会

文化職能人動員 郷土文化研究懇談

翼賛会文化厚生部肝入

時評 必勝の生活

第六四八号 昭和一八年二月一日 四面

出版界の戦時体制 整備愈々最後段階 一月末迄に完了

新事業体は百九十五社

出版界整備 “世話人” 百九十五名決定

時評 文教の一新

詩部会総会 詩文庫設置、詩史編纂等活発な提案続出

第六四九号 昭和一八年二月二五日 四面

一億国民常会に 美術家音楽家初登場

次回中央協力会議文化面拡充

時評 玉碎の忠魂に応へよ

決戦文学へ 全日本青年文学者が 一誌に団結邁進

委員長以下一局六部成立

雑誌統制 文藝誌の統合 着々進行す

次は短歌雑誌の廃合か

偶感 寛山

詩部会長 辞意漏らす 極力留任要望か

文報指導部長 戸川氏辞職す

創作時評 十二月号 大家と新進の作各一篇

武市如意

※倉光俊夫「海鷲」、川端康成「夕日」

大同靈驗記(下)

文展日本画評(完)

杉山寧(談) 三

豊田豊 三

第六五〇号 昭和一九年一月一日 八面

本年の課題 全藝術界あげて 大東亜への構想

戦果に応へる学藝人の闘魂

時評 皇国の勝利 今年にあり

海上日出

昭和一九春第壹語

ゆけ、ゆかうの精神

学徒いで征く

古典の流行

決戦下の読書(上) —— 松陰の読書訓 ——

窪田空穂 一

尾崎士郎 二

桜井忠温 二

北見志保子 二

藤田徳太郎 二

日本出版会理事長 久富達夫 三

出版界回顧 国家の要請に応ふ 決戦態勢近く確立 三

創作月評 二作家の通俗性

※上田廣「群線」、緒方久「昭和国民史」

亜細亜の藝術は亜細亜の伝統に

随想 戦艦献納画その他

随筆 みちのく画信

一問一答 時局と音盤

答へる人 音盤文協常務理事 有坂愛彦氏 六

横山大観 四

川合玉堂 四

福田翠光 五

劇団の品格

大日本俳優協会長

市村羽左衛門 七

第六五一号 昭和一九年一月八日 四面

初の資料受給査定に 都美術館を借受け

査定申請作品を待つ 美統万全の準備を進む

時評 美術家の新使命 美術界に望む(1)

昨年度の秀作 各種文学賞 それぞれ銓衡開始

まづ候補作品推薦開始

冬日

随想 国土的な考察

伝神洞展の更正

窪田空穂 二

福田豊四 三

豊田豊 三

第六五二号 昭和一九年一月十五日 四面

総決戦の年 美術界戦時体制突入に 近く強力議会誕生

委員の顔振れも公正厳守

時評 当局の断と美術家の挺身 藝術界に提言(二)

文藝時評(紙に見はなされた文人・閉会の儀礼)

文学報国会 五大宣言頭場に並行し

大東亜文学史を編纂 全会員総弾丸の活動開始

「時代の尖端をゆく」か 続々疎散に協力

八方に散る文壇人

作品月評 新年号 新年号の賢作愚作

※上林暁「小便小僧」、太宰治「佳日」、野村尚吾「有為

二

二

の売山」

其後の出版企業整備 どう進行してゐるか 三  
決戦下の読書（下）——写本について—— 三

日本出版会理事長 久富達夫

第六五三号 昭和一九年一月二二日 四面

雑誌統合 着々目鼻つく出版整備 残存綜合誌三誌決定

文藝専門誌に文藝春秋転向

時評 当局の断と美術家の挺身 藝術界に提言（三） 一

武田麟太郎氏 元気で帰る 一

財団法人日本美術及工藝統制境界

役員及事務局機構一覽表

文藝時評（短歌部会と我等の進路・短歌朗詠者と放送局の銚衡） 一

關ふ文学魂 食糧増産に筆の協力 各作家実況視察へ 二

大陸農民両委員会活発に活動

冬和 川上小夜子 二

大東亜戦の記録画（上） 豊田豊 三

随想 升形山麓にて（二） 田中吐哉州 三

崔承喜の炎華 大東亜舞踏創造への巨歩 四

中国古典の新舞踊化へ 帝劇の長期公演愈々迫る

第六五四号 昭和一九年一月二九日 四面

海上日出（御製・皇后宮御歌・皇太后宮御歌）

文報の転期 文壇人の増産面転身に

文報が世話役で幹旋 勤勞精神作興に万全策考慮

文学報国 編輯改変 会議制で全面的に出発へ

一隅より 量の戦ひ

文報勤勞報国 独自の勤勞隊の創造へ

出動を前に本部拡充 筋肉勤勞以外の面も吸収か

出足早い文人連 続く疎散後統部隊

図書館の貸出 外国文学激減

ジャワの文化施設

大東亜戦の記録画（下）

武田麟太郎（談）

豊田豊

第六五五号 昭和一九年二月五日 四面

藝術界の長老総蹶起の 情熱が産む無敵船艦

愛国の至情傾ける百八点

時評 勝利への道 身近にあり

文報評論隨筆部会 読会指導

書店も整備に着手 三月末完了の見込

「文報」の暗雲に愁眉 純粹文筆人新結集か

何か割切れぬもの胚胎

文報 小説部会長後任、正宗白鳥氏就任

文学報国二月集會

文士と疎開 止る者の意嚮は

(尾崎士郎氏・白井喬二氏)

辻小説の建艦献納 印税七五〇円

局窓に働く 豊田正子さん

創作月評 一月号 「文藝」の三作を評す

※壺井栄「掌」・堀辰雄「樹下」・新田潤「童顔の鷲」

出版界 企業整備大詰へ 残つたもの約百名

今後は出版部が整備を指示

雑誌整理統合の回顧(二) 業界誌の類から

段々と本格的に 業者の自主談合を促す

軍需工場の青年工に 図書の優先的配給

椎名局長議会で答弁す

第六五六号 昭和一九年二月二日 四面

挺身文学団へ 改組急迫の「文報」

積極的な人材を要望 三月総会に各部とも期待

時評 映画に望む 奮起を促す

職能、学術、思想の各雑誌の整備進む

夫々専門委員会で審議

報道班員の中央機関 尾崎氏等の肝入で近く設立

出版・読書 書籍部門の整備統合 今月中に全部完了

七十二社は審査を通過の予定

文化奉公会の文化面 火野葦平氏が号令

陣容整備やうやく成る

留日作家 日本語勉強中(徐守忠・宋桂棠)

雑誌整理統合の回顧(三) 官庁雑誌も整理へ

教育誌は面目一新 愈々本格的の整理に着手

映画の大東亜攻勢に 五大宣言宣揚作品

脚本制作に文壇十六氏を動員

戦ふ大衆演劇の脚本執筆決定

陸軍記念日中心作品

第六五七号 昭和一九年二月一日 四面

時評 動かぬ勤労隊

戦力増強生産面に 軍人援護運動結合

文人側派遣作家も決定

文壇人映画人が挙つて惜しむ才華

今は亡き三上於菟吉氏に各界が見せる愛惜の情

亡き於菟吉を憶ふ

大政翼賛会が読書運動に乗出す

全国読書委員会を設立

雑誌整理統合の回顧(四) 文協が創設されて

三者分担で進行す 「新風」其他創刊早々廃刊

勇士の郷土活写 軍人遺家族顕彰に 文筆彩管の合作行

軍事保護院文報美報が握手

随想 升形山麓にて(完)

第六五八号 昭和一九年二月二六日 四面

クエゼリン・ルオツトの闘魂に応へむ 勇戦六千五百の

英靈に 誓ふ一億総蹶起 決戦非常措置要綱決定 高

級興行歓楽場一時閉鎖

時評 痛憤、挙国蹶起せよ

愈々目覚しき共栄文化の活躍

雑誌出版から見た諸企画

出版企業整備 更に新事業体として 五十二社追加承認

第七回資格審議会に於て

武蔵野の冬

疎開 村の先生に 林芙美子氏決意を語る

日比谷図書館が大札記念図書二万部を疎開 敵の盲爆か

ら文献を護る

虚子翁 文報に寄付

陸軍記念日日期し 敵撃滅の筆舌陣 文報会員を大量動員

第六五九号 昭和一九年三月四日 四面

【一(三面不明)】

潜水艦同乗映画班 印度洋素敵作戦 (二)

：映画「轟沈」撮影行： 海軍報道班員 渡邊義美

決戦下の演劇界に産れるか戦線劇団

長田秀雄氏が率先提唱

第六六〇号 昭和一九年三月一日 四面

国民蹶起大会 畏き御信倚に答へ奉り 醜虜撃滅の

総進軍 新聞言論界挙げての雄叫び

時評 日露戦争と大東亜戦争

決戦下の文壇人 勤労精神昂揚へ

文報一斉に班常会開催

出版企業整備 愈々近く大話へ 新事業体廿三社と承認

残るは十社

婦人雑誌も決る 「文藝読物」は自社統合

潜水艦同乗映画班 印度洋素敵作戦 (三)

：映画「轟沈」撮影行： 海軍報道班員 渡邊義美

第六六一号 昭和一九年三月一八日 四面

文科系の学者総動員 近く研究班を組織す

戦争と建設とに寄与

時評 独逸国民の戦時生活

文学報国会各部 決戦総会順次開催

廿七日小説部会が筆頭

菊池賞に川端康成氏

さあ出動だ！ 文報・勤報隊立上る

書籍部門の整備 好調裡に完了す

愈々出新発する百七十社

文報機関紙「文学報国」編輯陣新強化

最近各の雑誌はどれ位売れてるか

潜水艦同乗映画班 印度洋索敵作戦(四)

：映画「轟沈」撮影行： 海軍報道班員 渡邊義美 四

第六六二号 昭和一九年三月二五日 四面

芸能人の総蹶起 さあ農村生産地帯へ 有名無名総出動

一代の名調子に決意披瀝

時評 出版新体制と規正の強化

文報 久米局長退陣 後任は中村武羅夫氏

立派な戦争文学 「兵隊と祝祭」発行

南支派遣軍報道部より

疎開荷物と取組む 文報勤労報国隊

渋谷汐留両駅に敢闘

第六六三号 昭和一九年四月一日 四面

国民思想指導のため 必要な用紙を確保

天羽情報局総裁議會で答弁

日本文学報国会 機構を教科刷新

勤労挺身と文学道邁進

時評 日本正史編修の盛挙

出版 戦力増強に図書動員 南方接收図書も整理

帝国図書館の二つの新事業

産業戦士のために「産報文庫」を発行

産報が講談社に協力して

「開拓文学賞」設定 文報内に委員会を設く

東都進出の耕人社 豊田豊 三

「狼火は上海に揚る」愈々撮影を開始す

上海でも阪妻は凄い人気 大映・曾我製作局長談 四

第六六四号 昭和一九年四月八日 四面

大日本藝能会 全国の技藝社大団結 四万人の総進撃

いよいよ廿九日発会式挙行

時評 世界最古の文化国印度

出版 決戦下新たな首途 新事業体発足の会

誓ひも堅き二百社結束

至誠報国の秋 陸軍報道部長 松村大佐(挨拶要旨)

舞踊論【二】象徴性について(中) 檜健次 二

戦ふ少女 藤蔭静江 四

第六六五号 昭和一九年四月一五日 四面

決戦新番線 歓楽場外の三番映画館も

一夜明くれば一番館 産業戦士に封切館を重点配給

時評 古剏大夫の藝術

ひびく疎開運輸 教科書配給が遅れるのは

輸送力問題が隘路 教育上には先づ支障なし

学会・総会など この際一先づ中止 二

◇近く文部当局から通達  
 文学雑誌何が残るか？  
 増炭激励文士報告会

第六六六号 昭和一九年四月二二日 四面

迫る統展 各部全甲種資格者に 出品招請状発せらる  
 時評 国民総蹶起運動へ  
 決戦生活実態を 作家連がお勉強  
 翼賛会が文報側動員  
 短歌雑誌統制寛大 専門二流派十六  
 他に女流綜合誌の用意あり  
 地方の動き 重大時局に対応し 集团的の読書運動  
 切り離せぬ『増産と本』の關係  
 共栄圏各国と図書交換を行ふ 帝国図書館が既に着手  
 文化中央聯盟主催 「舞踏コンクール」評【上】  
 薦元龍三

第六六七号 昭和一九年四月二九日 四面

出版新体制 新発足体制の総元締として  
 出版会も改組強化 新三部制を採用課を廃合す  
 時評 皇国護持の大楠公精神  
 戦争と藝術 聴き手は翼賛会 語り手は藝術家

総てを戦争へ 雑誌の廃合一段落 九百八十九誌が残存  
 全出版界の決戦体制整ふ  
 花誘ふ春の嵐に

文化中央聯盟主催 「舞踏コンクール」評【下】  
 薦元龍三

第六六八号 昭和一九年五月六日 四面

文学者も起て 文報陣容整備と共に  
 非常時下挺身態勢へ 三部二室制いよく新発足  
 時評 移動映画の効果  
 『紙』の朗報 今期割当四割減  
 一億総意捻出あの手この手  
 一段と内容の充実した 少国民向の軍事読物  
 この方面の良書出版期待さる  
 最近活況示す 比島の雑誌界 日本への認識愈々深まる

時詠二題  
 清潮会展評  
 川合玉堂  
 豊田豊

第六六九号 昭和一九年五月一三日 四面

美統展開幕 古賀元帥遺訓『戦闘一本』 藝術作品の  
 新使命 直接戦争物資獲得の実弾たれ！

時評			
文学報国会各部新役員(一)		憶古賀元帥	一
新編纂で遅れる 各学校の教科書			一
初等科は今月中には間に合ふ			二
出版新事業体に 編輯者の登録制			二
出版会で資格を銓衡			二
日本画院評		豊田豊	三
大日本興行会、芸能同業組合視是正		陣容を整備強化	三
岸田國士、高橋健二氏等理事就任			四
<b>第六七〇号 昭和一九年五月二〇日 四面</b>			
藝術院会員 補欠銓衡進む 会員会議五月中に開催			一
国民総蹶起運動 大詔の徹底 総力の結集へ			一
決戦態勢即応会議 文報三千五百会員が大会開催			一
時評 日独翻訳契約の成立			一
川崎市電起工に 文化勤報隊出勤			一
第一陣は文報勤報隊			二
日独翻訳権の確立 補償金仲介料決まる			二
諸般の手続が簡易正常化する			二
中等教科書 六月一杯で手元へ 暫らくのご辛抱です			二
文学報国会各部新役員(二)			二
作家・芸能家は何処へ疎開したか			二
おそ春の悲しみ 幡恒春君の死と思出 野田九浦(談)			三

批評 大東南宗展			
「音楽号」 献納運動 締切までにあと三万円		豊田豊	三
運動半ケ年 間の成果			四
<b>第六七一号 昭和一九年五月二七日 四面</b>			
美術も弾薬 予期以上の好成績裡に			一
使命果した美統展 後期展も絢爛絵巻を展開		豊田豊	一
青衿会展評			三
<b>第六七二号 昭和一九年六月三日 四面</b>			
文学者総蹶起大会 文化兵団の一兵に徹せん			一
盛り上る文学者の戦意 日本文学報国会全会員起つ			一
日本画壇の巨匠 池上秀畝画伯逝く			一
狭心症のため七十一の高齡にて			二
思ひ出語る 勤王愛国の精神			二
写本に観る烈々たる至情		細合秀毅氏談	二
形見となつた病臥中の二句		堀田秀叢氏談	二
故池上秀畝画伯を想ふ			二
年少時代の思ひ出		荒木十畝(談)	二
晩年の彩管報国		山川秀峰(談)	二
大輪展と新院展		豊田豊	三

第六七三号 昭和一九年六月一〇日 四面

美校音楽校も決戦体勢へ 美校の新陣容整ふ

在野派の一流揃ひ 学科の組織運営にも一大刷新 一

大日展評 豊田豊 三

第六七四号 昭和一九年六月一七日 四面

“必勝の神機至る”とヒ総統へ激励電報

独逸国民の善戦を祈る 一

時代の子 戦死した長男の事 小野竹喬（談） 二

二 展覽会評 豊田豊 三

海洋展日本画 日疋重亮 三

大阪市展 三

附記 「藝術新聞」は京都市立藝術大学附属図書館および東

京文化財研究所で閲覧した。ご高配に深く感謝いたします。

また、本研究はJSPS科研費17K02450および20K00346の助成

を受けたものです。

(さいとう・まさお／本学教授)